しいからです」と答えています。（P244）「個人が社会から支配されるのではなく、個人の行動がほかのひとの行動を巻き込んで、より大きな力になるのです。西郷隆盛や吉田松陰は自らの私欲を排することで、多くの人々を感激させ、明治維新にまで巻き込んでいったのです。……本質を変えるのは陽明学であり、社会を変えるのは「あなた」なのです。」（P246・247）という主張がなされている警世の書である。

○濱　久雄著『山田方谷の文−方谷遺文訳解』

平成十一年十月、明徳出版社刊。A5版、622頁。

解説のあと、本文は、方谷遺稿の序（川田甕江撰）、後序（進鴻渓撰）、方谷山田先生墓碣銘（三島中洲撰）、方谷遺稿の文があり、それぞれに書き下し文、語釈、大意、余説となっている。『方谷遺稿』三巻は明治二十三年十二月、三島毅（中洲）の編、義孫の山田準（済斎）の校によって刊行された。そのうち上巻と中巻が文章で、下巻は詩である。

本書は文章を収めた、上・中の二巻の訳注と余説である。なお詩については、宮原信氏により、『山田方谷の詩−その全訳』（昭和57年10月、明徳出版社）として、方谷の全詩千五十六首が、書き下し文、注、訳が付けられて刊行されていたので、本書と合わせると、『方谷遺稿』のすべてが、訳注され入手できることになった。なお本書には、巻末（というより後半P403−620）に、上・中巻の影印が収められており、『遺稿』が入手困難な折りに、非常に有り難い。なお宮原信氏にはこの書より先に『哲人山田方谷−その人と詩』（昭和51年6月、明徳出版社）、『哲人山田方谷とその詩』（昭和53年4月、明徳出版社）の2冊があり、本書で三部作が完成したという。

『方谷遺稿』の編纂および出版については、川田剛の序文に述べられているが、それを受けた浜先生の解説が分かりやすいので抄出すると、「本書の上巻には21篇、中巻には39篇の文章を収録し、すべて60篇であるが、全作品の38パーセントにすぎない。しかし、60篇の文章は、いづれも精選された名文で、……進鴻渓が後序の中で方谷の文を「議論公正、措辞精確にして法あり」と評しているように、方谷の文は実に理路整然として説得力に富み、意表をつく論が多い。」（P8・9）とある。ただ惜しいことに、「対策に擬す」という長文と「伯夷論」の2篇は収められていない。しかし他の収録されているものは精選された名文で、方谷の思想を知る要諦は本書に備わっているといえよう。

なおより深く究めたい人には、幸い『山田方谷全集』（全3冊山田濟斎編、昭和26年、山田方谷全集刊行会刊）が、明徳出版社によって初版本の影印が復刻されている。また前記の宮原信の『山田方谷の詩−その全訳』も平成十一年に再版されている。

○財団法人多度津文化財保存会編、吉田公平監修『林良斎全集』全一冊　平成十一年五月、ぺりかん社刊。A5版　916頁。

木南卓一の序、多度津文化財保存会秋山直也の発刊の辞。

本文は次の7項目に分けられて収録されている。

I　自明軒遺稿